

特集：鳥居坂の新しいシンボル

—新マーガレット・クレイグ記念講堂のパイプオルガン—

中・高部の校舎改築工事の最後の仕上げとして、昨年6月に新マーガレット・クレイグ記念講堂に待望のパイプオルガンが設置されて一年が経ちました。今回は設置委員として、パイプオルガン設置に深く関わった中・高部音楽科教諭の河野和雄先生に書いていただきました。

パイプオルガン設置に携わって

中高部音楽科教諭 河野 和雄

昨年（1997年）6月に完成した大講堂のオルガン設置についての記事を書くように委員会から依頼があった。設置に至る経過、楽器の特徴など主要な部分はすでにオルガンのパンフレット「東洋英和女学院大講堂のオルガン」および学院報「楓園」第21号に書かせていただいたので、今回の稿はそれらを補完するものである。個人的な記述の部分も多いがお許しをいただきたい。

楽器の女王

パイプオルガンは「楽器の女王」と言われる。楽器の中で最も大きく、オーケストラに匹敵するようなダイナミックな表現が可能な楽器という意味が込められている。名詞に性がある国の言葉では、「オルガン」は女性名詞であることから「王」でなく「女王」と言うのは興味深い。

オルガンの起源をたどれば、紀元前にまで遡ることができる。原型は何本かの笛を鍵盤で弾けるようにした素朴なものであったが、現在のような大型の楽器が作られるようになったのは15、6世紀のヨーロッパにおいてであった。楽器の発達は17、8世紀のバロック時代に一つの頂点を迎える。

この時代の作曲家バッハは当時、作曲家としてよりはオルガンの名手として知られていた。彼の作曲した250曲以上のオルガン作品は、今日でも最も重要なレパートリーとなっている。

オルガンはその後、時代の美学の変化と共に姿を変えた。オーケストラ全盛の19世紀後半にはオルガンもオーケストラの音色を志向するようになった。20世紀になって再びバロック音楽が見直され、また音楽作品がその時代の様式で演奏されることが良いとされるようになると、オルガンも再び当時の様式で作られることが多くなった。

オルガンのタイプを考える時、時代だけでなく地域的な要素も重要である。国により、また同じ国の中でもその地域によってスタイルを大きく異にする場合が多い。

現代では数百年前に作られた歴史的な名器から、現代の楽器にいたるまで様々な様式のパイプオルガンが各地に存在する。オルガン文化の歴史の浅い日本においては世界各国の様々なタイプのオルガンが輸入され、ホール、学校、教会などに建造された。また、日本のビルダーによる優れたオルガンもある。ある場所にオルガン設置を考える時、どのよ

うなオルガンを選ぶかは、多くの可能性の中からその場合の状況にあわせてしっかりとしたコンセプトを決め、適切な選択をしなければならない事柄である。

手づくりの楽器、オルガン

オルガンは例えば自動車や電気製品などのように機械化された工場で大量に生産される工業製品ではない。一台、一台、それが設置される場所に合わせて楽器の規模、音色、全体のデザインからパイプを始めとする細かい部品にいたるまで個別に設計され、大部分は手作業によって作られる。オルガンを作ることを「製作」というよりは芸術作品などを作る「制作」という言葉で表現するほうがふさわしい。オルガンは一つの建造物でもあるので「オルガン建造」という言葉もよく使われる。したがってオルガンには「機種」「性能」という概念はなじまない。「仕様」「表現力」などの言葉を使うべきであろう。オルガンを作る人、あるいは会社を英語では「メーカー」とは言わず「オルガンビルダー」、ドイツ語では「オルゲルバウアー」という。いずれも構築物を建造する人というニュアンスである。フランス語では「マニュファクチュール」というが、手で作るという意味がこめられている。

ドイツの場合、オルガンの技術者養成は昔ながらの徒弟制度によっている。熟練技術者「オルゲルバウマイスター」の資格を得るためには、まず経験豊富なマイスターの元で数年間見習いとして修行する。その後、ドイツ国内に一か所だけ在るバウアー養成のための学校に一定期間通う。この種の学校は世界でもここだけであるそうで、講習が行われる期間には各国からの受講生が集まるといふ。決められたカリキュラム終了後、国家試験として自分の責任で設計したオルガンを実際に制

作し、その作品が合格すると初めて「オルゲルバウマイスター」の称号が与えられる。

英和にふさわしい音をもとめて

新マーガレット・クレイグ記念講堂のためのオルガン設置委員会は1994年10月に初めて招集された。当初のメンバーは黒川信也高等部長を委員長とし、清野禮中学部長、河野和雄（音楽科）、遠藤あかね（音楽科）、佐藤順子（聖書科）、内藤達（数学科、建築委員長）および道家純法人事務局長であった。第2回の委員会からは卒業生でオルガニストの今井奈緒子が専門委員として加わり、次年度からは太田桃子（音楽科）、武田ゆり（音楽科）も委員として加わった。

実質的な討議は筆者が留学から帰国した翌年1月から始まったが、委員会はまず「英和の大講堂にはどのようなオルガンがふさわしいか」から検討を始めた。

毎日の礼拝に奉仕する楽器であるから美しい音色で、奏楽者が使いやすい楽器であること。礼拝のためだけでなく、芸術文化の教育にも十分に役立つ楽器でなければならない。女子の学校でもあるし、柔らかく温かい響きが良い。どちらかというところロマンティックなオルガン音楽に重きを置き、それに充分対応できる規模と音色がほしい。特色があり学院のステータスとなるような楽器であることなど、このオルガンに望まれることは多かった。

ありがたかったのは費用のことがすべてに優先するのではなく、最もふさわしいものをということに集中して考えることができたことである。

一応のコンセプトを決め、何か所かのオルガンを実際に見学し、ビルダー候補を決定した。

見積りを依頼したのは次の6社である。

フィッシャー+クレマー（ドイツ）

ハインツ (ドイツ)

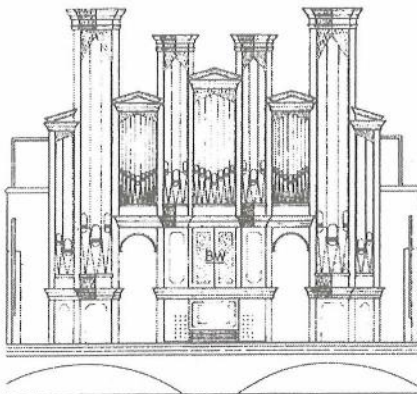
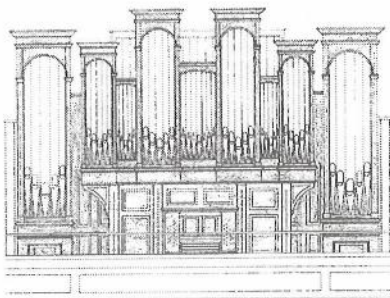
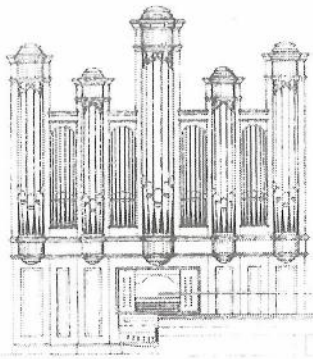
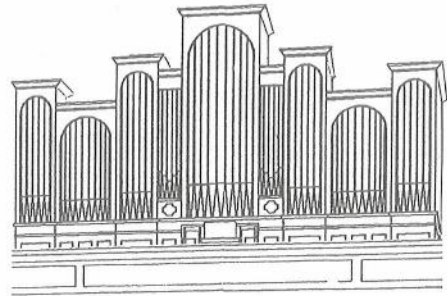
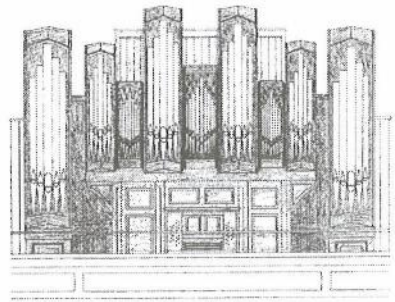
ケルン (フランス)

ガルニエ (フランス)

メツラー (スイス)

大林徳吾郎 (日本) 順不同

いずれも優れたビルダーで各地に素晴らしいオルガンを建造している。どのビルダーに依頼しても大講堂にふさわしい美しいオルガンを制作してくれたことであろう。



5社から提出された見積書をもとに様々な角度からの検討がなされた。候補を3社に絞ってからの現地調査、最終的に残った候補は、フィッシャー+クレマー社とメツラー社であった。

後者は古い伝統を持ち、素晴らしいオルガンを作るビルダーであるが、ひところは日本にはオルガンを作らないという定評があった。理由ははっきりしないが、キリスト教国でない日本には作らないのだと言う人もいた。が「日本は遠すぎてメンテナンスが十分にできないのではないか」という職人としての良心が最大の理由ではなかったろうか。そのメツラーから見積りが提出されたというだけでも驚きに値することであった。

ちなみに初めて日本向けに書かれた見積書は円建てで、その価格の数字には0が一つ足りなかった。

現地調査で見学した同社のオルガンも素晴らしかった。特徴としては、北ドイツ風、バロック風、オルガンらしさ、各ストップの個性的な美しさなどの言葉が当てはまるであろう。日本で初めてのメツラー・オルガンというのも魅力であった。

しかし、委員会は英和にふさわしいオルガンと

して当初考えたコンセプトを尊重し、穏やかで柔らかいロマンティックな響き、アンサンブルの良さを持つ前者のオルガンが総合的に考えてよりふさわしいであろうとして判断し、フィッシャー+クレマー社に制作を依頼することに決めた。

オルガンの規模は鍵盤の数、ストップ数によって決まる。ストップとはオルガンの中にある数百から数千本のパイプを、様々な音色ごとにまとめ、そのグループ一つ一つのこと。またはそれを個々に鳴らしたり、止めたりする装置の名称である。

座席数、ホールの空間の容積をもとにしてそのホールのオルガンの適当なストップ数をおおよそ決める方法がある。

$$\left(\frac{\text{ホールの座席数}}{25} + \frac{\text{空間の容積(m}^3\text{)}}{150} \right) \div 2$$

が良く知られた計算式であるが、この式で計算すると大講堂に適当なオルガンの規模は35ストップ程度である。もちろんこれは一つの目安であって、ホールの音響の具合、楽器の用途等によってはかなりのは程度(±50%位)の幅は考えられる。今回設置されたオルガンは38ストップであるから、大講堂にはちょうどよい規模といえる。

クレマー氏の来日

フィッシャー+クレマー社は2人のマイスター、フィッシャー氏とクレマー氏がドイツとフランスの国境に近い町、エンディングゲンに1970年に共同で創立した比較的新しい会社である。新しいオルガンの制作のかたわら、南ドイツのシュヴァルツ・ヴァルト(黒い森)地方のあちこちにある歴史的楽器の修復などを多く手掛けていることから、その響きはドイツ、フランスの両方の影響を受けたこの地方のオルガン風土の伝統的な響きを反映している。

オルガンを設置する場合、設計者に実際にオル

ガンが置かれる場所を見てもらい、その雰囲気、響き、さらには学校の様子、音楽生活など図面からでは分からないことを知ってもらうことは是非必要なことである。ちょうど住宅の設計者が住む人との十分なコミュニケーションをもった上で設計するのと同じである。

我々の求めに応じて新講堂竣工間もない95年2月の末、代表者の一人クレマー氏が来日した。氏にはまずオルガンが一番多く使われる機会、礼拝に出席していただいた。新講堂をまだ正式に使い始める前であったが、高等部の礼拝を特別に音楽礼拝として講堂で行うことにした。聖歌隊の合唱、ハンドベルなども入った礼拝であった。クレマー氏は講堂について「思っていたよりずっと大きな空間」、「オルガンのために素晴らしい響きを持っている」などとその印象を述べられた。ハンドベルも初めて聴き大変感銘を受けたとのことであった。

問題点も改めて明かになった。講堂の空調は運転を始めたばかり、まだ試運転という段階で、温度、湿度の調整の調子もまだつかめていない時期であった。客席を適当な温度にするために真冬というのにギャラリース席は28度以上あるような状態で、むし暑い中での打ち合わせであった。しかも運転開始から短時間での温度の急上昇、それに伴う湿度の減少がオルガンの木部に及ぼすであろう悪影響が深刻に懸念された。(現在は実際の運用を始めて二冬を経験し、運転管理にも習熟して、温度、湿度もほぼ許容範囲に納めることが出来るようになっている)

温度差の影響は音楽的な面でも非常に大きい。オルガンは基本的には管楽器である。管楽器は温度の変化によりピッチ(音の高さ)が上下する。室温が何度かの時に標準のピッチを設定すべきか。これはオルガンだけで演奏する場合は問題ない

が、他の楽器との合奏、特にピッチを調整できない楽器、例えばハンドベルと合わせるときに問題となることは明らかであった。また天井からの吹き出す温風による暖房のため背の高い楽器の各部は高さによりかなりの温度差が生じることは避けられず、各鍵盤間のピッチのずれも予想された。この点に対する対策としては、温度差をできるだけ小さくするためにパイプが置かれる高さをできるだけ同じにするなどの工夫が設計に反映された。

オルガンのケースの色を決めるのも難しかった。通常はオルガンも設置される場所に溶け込むようにそこにある色にできるだけ近い色を選ぶが、残念ながら大講堂にはすでに色々の濃さの茶色があり、そのどれもがギャラリー席に置かれるかなり大きなヴォリュームのオルガンの色としては適切ではなく、結果的には孤立した感じにはなるが現在の色が選ばれた。トータルなカラー・コーディネート的重要性を思わされたことであった。

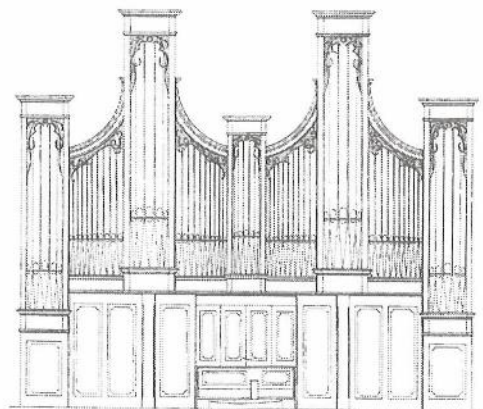
プロスペクト案の変遷

オルガンの顔となる前面をプロスペクトという。よいオルガンは必ず美しいプロスペクトを持っていると言われる。見積りの段階で各社から提出されたプロスペクト案はそれぞれ魅力的であった。すべてに共通していることは、この講堂の窓、あるいは校舎のあちこちに使われているロマネスク風の半円アーチがそのモチーフとして使われていることであった。

その中でフィッシャー+クレマーの最初の案はユニークすぎて受け入れにくいものであった。素晴らしいオルガンを作るビルダーの中には独特の制作ポリシーを持っていて、施主の要望であっても、良いと思わないとなかなかその要望に応えてくれないビルダーもいる。その点フィッシャー+クレマーはこちらの希望を非常に良く聞いて

てくれた。プロスペクトのデザインについてもこちらの意をよく汲み取って何度も書き替えてくれた。(と言っても、こちらから具体的なイメージを示すことは出来ず、示された案に対して気に入ったとか、気に入らないとか言っただけであったが。)最終的に決まった案は古典的なスタイルで、半円形のアーチのモチーフも逆向きの形にとりいれられ、量感と共に繊細な優美さを持った美しい形に仕上がったのではないと思う。

前面パイプ上部とケースとの間に出来る空間を埋めるために飾りをいれる。古典的なプロスペクトの場合には唐草模様の彫刻の飾りであることが多い。ここに校章の中に入っている筆記体のTとEの文字をうまく組み込めたら面白いと思って、クレマー氏来日の折にその話をした。彼も興味を示し「飾りを作る彫刻家に伝える」という話であった。くれぐれもわざとらしくならないようにと念を押したつもりであったが、乏しい語学力のせい、あるいは彫刻家の受けとり方のせいかならないが、最初に送られてきたデッサンはなんとTとEだけの、何か禅寺の窓を思わせるさびしいものであった。

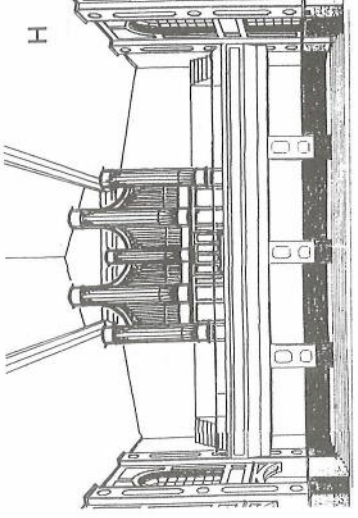
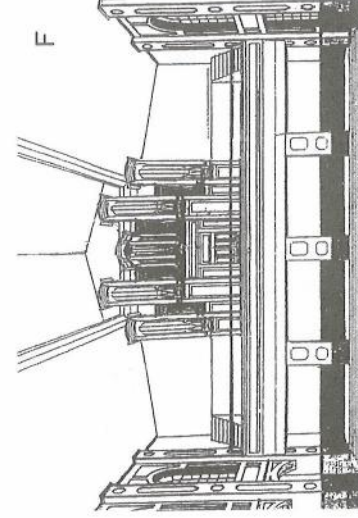
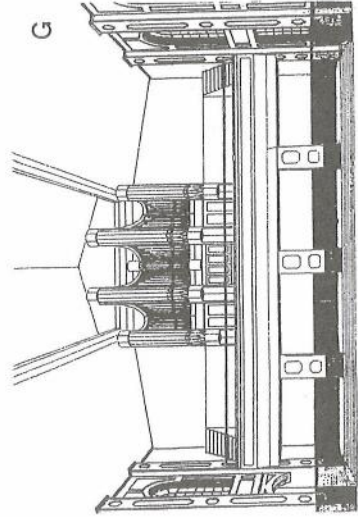
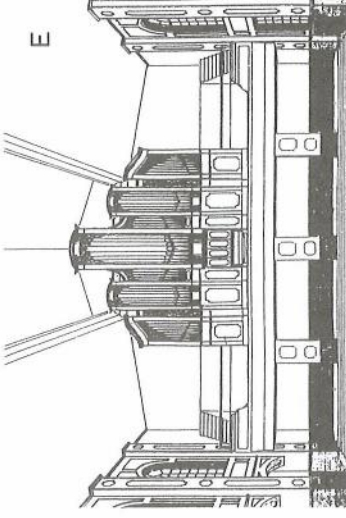
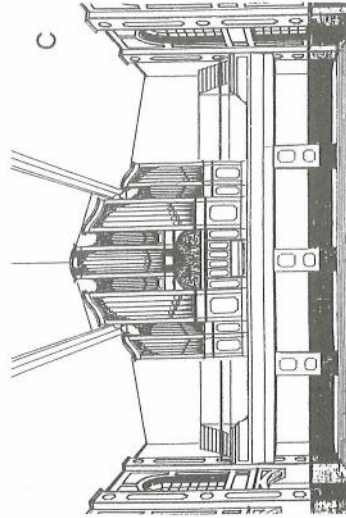
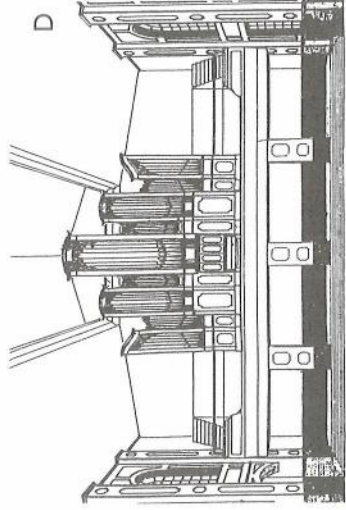
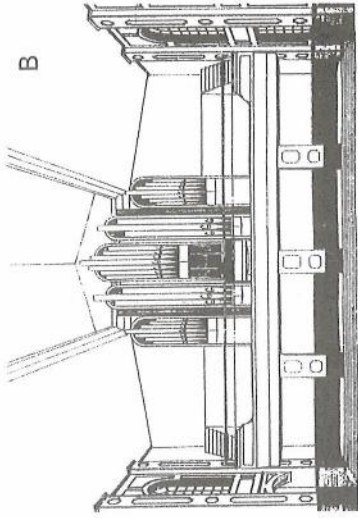
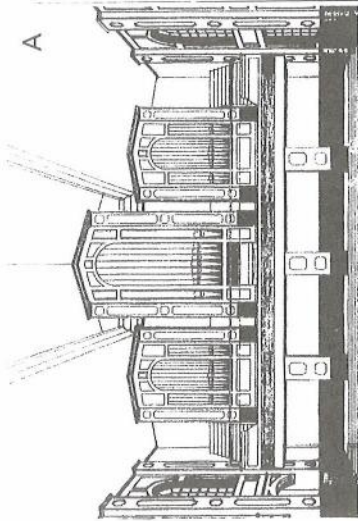


何度かのやりとりの後、現在のデザインにおさまった。

古典的なプロスペクトの場合、彫刻の飾りをもう少し多く、ケースの外側などにもつけることが

プロスペクト(前面)デザイン案の変遷

- A B 最初に提案された案
- C D E 2回目の修正案
- F 3回目の修正案
- G 4回目の修正案
- H 5回目の修正案(ほぼ決定)



多い。また彫刻の飾りの部分、あるいはプロスペクトパイプの上唇の部分に金箔を貼ればもっと品格が備わる。ビルダーからの勧めもあって色々考へ討議したが、結論的にはいずれもしないこととなった。華やかさと同時に質素で控え目な面も併せ持ったプロスペクトは英和らしい選択の結果ともいえる。

細かい所ではケースの鏡板の表面凸部の四隅は角を丸く落としてあり、さり気なく講堂の壁面にある飾り縁（凹凸の部分）と合わせている。

トータルとしてはオルガンは古典的な雰囲気を持つ講堂に良くマッチしていて、見慣れてくると、すでにずっと以前からそこに有ったような気さえる。

弾きやすく、そして保守しやすく

「シンプル イズ ベスト」これがコンソール（演奏台）の設計のコンセプトであった。近代的な大型オルガンのコンソールはストップ、コンビネーション、カプラーなど、手や足で押ししたり操作したりする多くのボタン、レバーの類、また時にはメーターなどがに備えられていて、その配置によっては煩わしさを覚えることも多い。

英和のオルガンのふるさとに近いアルザス出身で、医者、神学者、オルガニストまたオルガンの研究者でもあったA. シュヴァイツァーは90年前にこれを「大きな駐車場の転軸装置」とたとえた。現代ならさしずめスペースシャトル発射のコントロール・デスクになぞらえたことであろう。

操作の煩わしさを少なくしたい。弾きやすいオルガンとするために、たとえばストップの配置は、初めてこのオルガンを弾く人も直ぐに把握しやすいように工夫する。小柄なオルガニストでもストップに楽に手が届くように。余り使わないボタンスイッチ類はないほうが良い。どうしても演奏中

に必要なもの以外はつけない。このような方針でシンプルなコンソールを目指した。

これも特徴の一つであるが、このオルガンはゆったりとしたスペースに作られている。上の通路とギャラリー床面の段差をうまく利用してオルガン内部に楽に入れる構造になっている。これほど楽器の内部を見学しやすいオルガンは珍しい。設置後1年半を経過した今、すでに生徒を含めて数百人が内部を見学しているはずだ。

ゆったりとしたスペースはもちろん本来は見学者のためではなく、音の拡がり、保守のしやすさのためである。トランペット、オーボエなどリードを持ったパイプは季節により室温が変わるごとに調律する必要があるが、快適に調律できる。定期的な点検、また万一故障があった時の修理も楽な姿勢で作業できるのは大変にありがたい。

捧げられたオルガン

このオルガンは多くの方々の祈りと貴い献財によって捧げられた。

学院の正式な募金は1996年の7月に始まり、期間は1998年6月までの2年間であった。これに先立って、中高部の中では1990年頃よりオルガン設置のための寄金を受ける口座が作られ、色々の機会に寄せられる寄付、学年会（同期会）など折々の集まりの会費の残余金、音楽鑑賞教室演奏者などからの寄付、器楽科オルガン受講生の受講料、音楽会収益など多数の善意が集められた。中高部母の会はかなり早い時点で「オルガン設置のため」という目的を掲げてエプロンなどを制作しその販買利益を寄付する活動を始めた。生徒会もテレフォンカードを制作し募金に協力した。

正式な募金が始まると教職員、卒業生（海外からも）、保護者、その他各方面からの多くの寄付が寄せられ、オルガン設置に対する期待の大きい

ことを改めて知らされたことであった。

また、募金のための音楽会も多く行われた。卒業生の合唱団、メサイアをうたうの会は数回にわたる演奏会の収益を捧げた。その他、今井奈緒子氏による11周年記念オルガン演奏会(1995年10月、新宿文化センター)、河野、武田のオルガンに生徒の合唱、ハンドベルも加えた、チャペルコンサート(1996年7月、霊南坂教会)、その他、オルガン設置のために行われた卒業生のコンサートなど枚挙に暇がない。

これらの募金活動に対して寄せられた寄付金は1,500を越える個人やグループから総額は約7,800万円に上り、オルガンの本体価格はもちろん、輸送、保険、組立てその他の諸経費のほとんどを賄うことが許され、まことに感謝に堪えない。

あれこれ

今回のオルガン設置に際して輸入業務の代行、組み立て作業などに全面的に協力をいただき、また今後も通常のメンテナンスの面をお願いするマナ・オルゲルパウは輸入業社ではなく、優れたオルガンを制作しているれっきとしたビルダーである。代表者の松崎譲二氏と中里威氏は共にオルゲルパウマイスターの資格を持つ。フィッシャー+クレマー社の技術者に松崎氏の友人がいることから、このプロジェクトにマナの協力を求めることは同社からの要請であった。マナの事務的な仕事をきりもりしている松崎夫人はオルガニストでもある。ビルダー決定前のある日、町田の工房で初めての打ち合わせ。中里氏とこんなオルガンが欲しい、こんな工夫はどうかなどと話していると松崎夫人が一言、「そのオルガン、マナにさせて下さい」。返す言葉がなかった。ビルダーによその会社のオルガンの世話をお願いするのも厚かましいことである。

ビルダー候補が決まって、見積りを依頼していた頃、フランスが南太平洋で核実験を行った。これに抗議して、日本でもフランスワインの不買運動などが起こったが、オルガンの世界にもその影響があらわれた。ある教会がフランスのオルガン設置を計画していたが、契約直前に牧師の強い意向によりビルダーとの交渉を中止した。そのビルダー自身は環境保全運動にも熱心で、核実験にはもちろん反対の立場であったそうだ。英和のオルガンがフランスのものでないのはこれらの事情とは関係はない。しかし、もしそうであったとしたら募金などに影響があったであろうか。

95年の暮れから冬休みを利用しての現地調査。移動はレンタカー、数日間で3社を訪問するスケジュールは綱渡りのであった。雪で予定通り走れなかったらという心配が出発前からあった。ドイツ上空に入り下を見ると一面の銀世界、ベルリンではマイナス20度などという話を聞いたりすると気が気ではなかった。飛行機がフランクフルトに近付き高度を下げ、道路の車がスイスイと走っているのが見えた時やっと少し安心した。空港からいきなり本番の運転、十数時間で全く違った世界にワープしたようで、一瞬なぜこんな所を走っているのかとさえ感じた。しばらくは「右側通行」「Rechts vor links (右優先)」などと自分に言い聞かせながらの運転であった。

ドイツでは1月6日のエピファニー(顕現日・東方の博士が来たとされる日)までがクリスマス、星やクリッペ(クリスマスの情景の人形飾り)等クリスマスの雰囲気が残る教会をあちこち見学し、1週間で移動した距離は約2,000キロ。時には雪やみぞれの中を走るハードスケジュールであったが、有意義そして本当に楽しい旅行であった。

このオルガン設置についてのビルダーとの連絡はほとんどファックスで行われたが、その便利さを改めて実感した。学校で帰り際にファックスを送って家に帰ったら返事がもう来ていたということもあった。いくつかのビルダーとの連絡を含めて往復した手紙は数十通を数える。筆者の語学力は「通じればよい」という程度であるので、手紙を書くと言うことは毎回苦痛であり、時間のかかる仕事であった。急いで読み返すことも無く送ることもあった。ドイツ語では助動詞と動詞の位置が離れて動詞が文末に来ることも多い。送った後で読み返して見ると肝心の動詞がなく、恥ずかしい思いをすることも一度ならずあった。でもなんとか通じたのだろう。とにかくオルガンは入ったのだ。

自動クレッシェンド装置は特にこのオルガンのために開発してもらった装置である。そもそも、足で踏む踏板、またはドラムで操作してストップの数を増減するクレッシェンドの装置はロマン派の音楽の演奏、またはロマンティックな演奏スタイルのために20世紀前半に多く使われた装置で、現在はあまり使われなくなっている。シンプルなコンソールを目指す意味からも今回のオルガンにはつけないつもりだった。しかし、あるきっかけから急遽違う形でのクレッシェンドの装置を開発してもらうことになった。クレーマー氏来日の折、帰国する前の晩、同社のオルガンのCDをプレゼントしてくれた。その中にはある高名なオルガニストの即興演奏が録音されていた。これを聴くとクレッシェンドの装置が効果的に使われており、英和のオルガンにもやはりこの装置を付けたほうが良いと思うようになった。そしてこれを自動的に働かせるアイデアはシュヴェーリンのドームオルガンから得た。(パンフレット、楓園参照)

彼が帰国する日の朝、エアポート・リムジンの出発する全日空ホテルのロビーで慌ただしくその構想を説明した。このアイデアを一つの具体的な装置として開発してくれたコンピューター技術者に特に感謝したい。

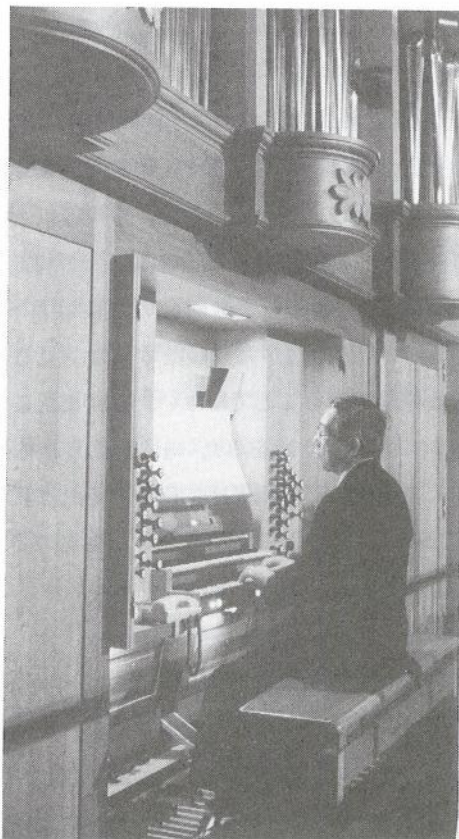
資材搬入当日、午後にはもうモンタージュ（組み立て）が始まった。マイスターのクラッセン氏は折尺で気軽に壁からの距離を測り、下敷きとなる木の枱板を床に置き、組み立てを始めた。その位置が以前私がそれ程精密にはないが測ってマジックで印を付けていた位置と20センチほど違う。中里氏に頼んで指摘したがすぐには直してはもらえなかった。動かせなくなってからでは遅い。大林組の渡辺所長は事務所から下げ振り（糸のついた重り）を取り寄せ、目印から測ってギャラリーの中心を確定した。中里氏曰く「彼がこの講堂を作ったんだ」。マイスターもこれには従った。

モンタージュ（組み立て）担当のヴァンネンマッハー氏、一月ほどで組み立て作業を終え、整音作業に後を引き継いで先に帰国。中規模以上のオルガンの場合、組み立てと整音は担当が別であることが普通だそうだ。送別会の時彼は言った。「モンタージュ担当が完成したオルガン見ることはそう頻繁にあることではない。是非またこのオルガンの完成した姿をみたい」。同席した内藤先生、これを聴いて感慨深げに曰く「それは我々の教育と同じ。何年かのちに成長した生徒の姿をみるのは喜びだ」。

通常、正式な契約から完成までは数年かかる。英和のオルガンが正式な契約から1年、見積り依頼からでも2年足らず完成したのは異例の早さといえる。契約でもあと半年はかかるはずであった。

あくまでも推測であるが、次の仕事との順番を入れ替えてくれた可能性がある。ドイツにおいても教会にオルガンをいれることは以前より困難な状況にあるようだ。資金調達のために設置時期を少し延期する方がその教会にとっても好都合な場合もあるとのことである。このような事情と関係があったかは分からないが、いずれにしても幸運であったことは確かである。

オルガン完成の記念にパズルを作った。これはドイツのある教会のユニークなアイデアを拝借したものであるが、いざ作ろうとした時パズルを作ってくれる所が分からない。そこで思い出したのが、NHKで日曜日の夜放映している番組「日本人の質問」。トップ賞として与えられるのが解答者全員の似顔絵のパズル。番組制作の担当者に電話をして作ってくれる所を教えてもらった。前



面のパイプが入ってオルガンの顔が一応整ってから撮影、それから奉献式までは一月足らず、オルガンの回りのギャラリーの手摺などの工事は間にあわないのでコンピューター処理で修正、とにかく間に合わせるために色校正の時間が取れず、実際の色とかなり印象が違う色に出来上がってしまったのは残念であった。

このオルガンは講堂の後部に設置されているために、演奏者を直接見ることはできない。講堂のステージを中継するための映像入力端子がたまたまオルガンの近くに取り付けられていたのでそれを利用して演奏の様子をステージのスクリーンに映写できるようにした。これもオランダのある教会で行われたアカデミーでの工夫のアイデアを拝借したものである。すなわち教会によってはギャラリーにあるオルガンの演奏台の回りが狭く、多くの受講生が鍵盤をよく見える位置に行けないことも多い。その講習ではビデオで鍵盤の回りを写して、そのレッスンの様子を下の会衆席でよく見えるようにしていた。

やってみるとなかなか好評である。ただプロジェクターのモーター音をもう少し小さくする工夫をしなければならないが。

ひろがる夢

奉献式の後フィッシャー氏、ライザー氏の送別会を兼ねたお祝いのパーティーでマナの松崎氏は言った。「オルガンを壊すのは難しくはない。弾かなければよいのだ」。毎日の礼拝で必ず使われる英和のオルガンにその心配はないが、数多くのオルガンの中には余り使われないため調子が悪くなるオルガンが少なからずあるのも事実である。近年、公共のホールにオルガンが設置されることも多くなったが、そのオルガンが必ずしも有効に

運用されていない場合もある。ハードの整備とともにソフト面にも力を入れなければならない。

毎朝、主として高等部が大講堂での礼拝を守っている。本物のオルガンの響きを伴奏に元気に讃美歌を歌ってほしい。そしてその響きを心に残し、何かの時に思い出してほしい。

礼拝だけでなくもう少し本格的にオルガン音楽に触れさせたいと思い、原則として毎水曜日、昼休みに「昼のオルガンコンサート」を始めた。これも四半世紀以上前、筆者が初めて英和に就職した時、元の大講堂のエレクトーンで始め、数年続けたオルガン・メディテーション「オルガンと瞑想のとき」の再開のつもりである。本当のオルガンが入ったからには、今度はできる限り続けたい。生徒だけでなく、昼休みに学校の前を通りがかった人も聴けるようにできたらとも考える。

地域の小、中学校の音楽教室としてオルガンを見ていただくのも良いのではないかな。きっとオルガンに興味を持ち、将来のオルガニストがその中から出ることであろう。

オルガンを弾いてみたいという生徒も多い。オ

ルガン同好会、器楽科などの名前で細々と続いてきたオルガンレッスンも今年度は人数がぐっと増えた。オルガンの専門家となった卒業生の協力も得て、内容をもう少し充実させ、伝統あるピアノ科のようにオルガン科ができたなら。

外部の演奏家を招いての演奏会も年に何回かは計画しよう。このオルガンを使つての講習会、アカデミーも有意義である。

そういえば生涯学習センターの活動にも有効に利用できるのではないかな。あちこちの公共ホール等でも希望者を公募して専門のオルガニストがレッスンをする活動をしている。

さしあたって絵葉書やCDも制作しなければ。夢はどんどん広がる。

バッハ以前の楽器で今なお現役で日曜の礼拝に奉仕しているオルガンもある。手入れをすれば数百年の寿命のある楽器、24世紀、25世紀にはどんな人がどんな曲を弾いているのであろうか。建物はそれほどもたないだろう。楽器はどこにあるだろうか。その頃、そもそも英和は残っているだろうか。



あとがき

多くの人達の願いや助力によって、すばらしいパイプオルガンを新マーガレット・クレイグ記念講堂に設置することが出来ました。感謝の気持ちでいっぱいです。これまでに何度かの演奏会や、折にふれてのアフタヌーンコンサートなどが催されました。きれいな音色で朝の礼拝を讃美できる喜びを、かみしめている毎日です。

(中高部 古沢育恵 保坂優子)

史料宝だより 目次No.41～No.50

No.41 (発行1994.7.15.)

旧校舎のころ	
昭和12年～17年まで	村井 静子
旧校舎思い出すままに	鳥居 美子
昭和20年～30年代	高橋 温子
失われた校舎の礎石の中から	

No.42 (発行1994.10.1.)

短期大学の宗教教育	
80年代の短大宗教部	十時 英二
インタビュー	
「神さまの導き」によって	
シャーリー・ジュティーン	

「短期大学“宗教部だより”」から……②

特別寄稿

「これから」がここまで導かれて	芝 恭子
「小児相談センター」から「子ども相談センター」への歩み	
	岡田 洋子

「短期大学“宗教部だより”」から……③

No.43 (発行1994.11.6.)

東洋英和110周年記念号	
中高部10年間の変遷	栗原 正己
小学部10年の歩み	伊藤 博正
10年の重み	丹羽 輝子
短期大学の10年	
短期大学の移転をめぐって	岡田 洋子
横浜キャンパスに移りて	石津 珠子
「地域研究Field Work」－アメリカ研修について	朝日由起子
国際教養科の10年	山岡 清二
かえで幼稚園の歩み	土橋 克子
大学の歩み	岡本 浩一

No.44 (発行1995.11.6.)

(横浜校地の集会室特集～写真にきりとられた情景～)

役割を終えた集会室	
集会室のさまざまな利用	
文化的催しについて	
集会室での催しもの	
教室として使われた集会室	
(健康相談室から)	
健康相談室雑感	住吉 純子
新しい健康相談室	
短大健康相談室の利用状況 (1989年度から1994年度まで)	
	尾花 智子

No.45 (発行1996.7.15.)

旧追分寮	
追分寮管理日誌欄外	栗原 正己
追分寮・表と裏のはなし－番頭さんの思い出－	水野 誠
神と出会い 友とかたる	水野 静子

No.46 (発行1996.7.15.)

「さようならブラウン先生」	
メリル・ブラウン宣教師への感謝の集い	
ブラウン宣教師の紹介	清野 禮
メリル・エリザベス・ブラウン先生 略歴	
「日本での宣教師活動での思い出」	
Merrill Elizabeth Brown	
ブラウン先生への感謝	松田 昭彦

No.47 (発行1997.3.15.)

東洋英和と私	
英和と私	上野美代子
宣教師の方々への感謝－	木山 房子

No.48 (発行1998.3.4.)

かえで幼稚園創立25年	
特別記念講演 親とは子どもに語る人	松居 直
かえで幼稚園25年の歩み	土橋 克子
父母と共に	森高ホサナ
かえで幼稚園と私－卒園生のことば	
『キリスト教との出会い』	佐々木由起子
『かえで幼稚園とわたし』	原田南海子
『かえで25th同窓会に出席して』	河田 紀子
かえで幼稚園25周年記念行事	青木 玲子

No.49 (発行1997.3.18.)

「母の会創立60周年記念事業」	
センテナリー教会ルール牧師講演	(小池久子訳)
「母の会60周年記念」によせて	阿部 恵代
センテナリー教会と東洋英和女学院	廣井 理加
センテナリー教会で礼拝を捧げた思い出	内藤 由佳
滞在日記	土屋 千昌

No.50 (発行1998.4.30.)

新しい世紀へ向けて	
中高部校舎第三期工事について	黒川 信也
プレハブ校舎の思い出	雨宮美枝子
電子オルガンの時代	河野 和雄